

平成29年度須影公民館ふるさと歴史講座

## 須影八幡宮周辺を訪ねる



須影小学校二宮金次郎像

日程 平成29年10月14日(土)

- コース
- ① 須影小学校 (須影小学校・二宮金次郎像・一等水準点)
  - ② 蓮華寺墓地 (蓮華寺跡・武蔵川大治郎墓碑・富士塚)
  - ③ 須影運動公園 (大型板碑・立志の像)
  - ④ 会下山・須影愛宕神社

主催 須影公民館  
講師 羽生市文化財保護審議委員  
間仁田 勝

# 1 須影小学校

## (1) 小学校の歴史

須影小学校の前身である砂山学校は、明治6年3月24日、羽生市内で4番目の小学校として砂山村の島山寺内に設置された。

設立当初は、第1番大学区第13番中学区第28番小学区（翌7年に第71番小学区となる）の学校として、その名を冠した学校名であったが、明治9年からは砂山学校と言われるようになった。



強く明るく正しい子

通学区域は、砂山村、上川崎村、中川崎村、下川崎村であった。

須影村、加羽ヶ崎村、秀安村は明治6年3月に上手子林村の富徳寺内に設置された正名学校の、下羽生村は羽生学校の通学区域となっていた。

明治15年の『北埼玉郡郡治概要』には「砂山村日正学校」とあり、その頃には校名が「日正学校」に改められていることがわかる。

その後、日正学校も、島山寺の仮校舎から下川崎村新田1139番地の通称地蔵山と言われている場所に校舎を新築し移転している。

明治18年11月21日、富徳寺が放火で全焼、寺内にあった正名学校は廃校となり、須影村、加羽ヶ崎村、秀安村が日正学校に通うこととなった。それに伴い、明治19年3月、日正学校は、新たに通学区域となった須影村21番地に新築移転し、校名も「日盛学校」と改称した。

その日盛学校も、翌20年1月1日午前9時、新築間もない校舎は放火により焼失してしまった。

そして明治41年1月14日、日盛学校は、須影村須影657番地、いわゆる現在地に移転、さらに、翌42年3月1日に、合併後の新制須影村の名を冠した須影尋常小学校と改称した。

その後、大正9年には高等科（後の須影中学校）新設に伴い須影尋常高等小学校と、昭和16年には国民学校令の公布に伴い須影国民学校と、それぞれ校名が変更されていったが、戦後の昭和22年の学校教育法の公布により、新制の須影小学校がスタートしたのであった。



少年健康像

## (2) 二宮金次郎像

須影小学校の校門脇に二宮金次郎の像がある。台座には金治郎の愛した「勤儉力行」の文字及び由来とともに、昭和13年9月に建立されたとある。

昭和13年、一人の青年が須影尋常高等小学校（今の須影小学校）を訪ねてきた。東京に住む酒井義次郎氏とのこと。

話によると、大正12年(1923)の関東大震災の時、上川崎にある母親の実家に疎開した折、この小学校の初等科で学ばせていただいた。ほんの3ヶ月という短い学校生活であったが、先生方や同級生に良くしていただいたことを今でも思い出す。なにか報恩の気持ちを表したいとのことであった。野中光吉校長は、酒井氏の好意をありがたく受けることとし、日頃より二宮金次郎像が無いことを気にしていたことから、酒井氏に申し出たところ、快く受けて頂いた。そして、校舎の玄関前に背丈ほどの台座の上に薪を背負って、書物を読みながら歩く姿の二宮金次郎像が建立された。

金次郎像も、昭和51年頃になり、長年の風化により、手がとれ、修理がきかない状態になったことから、撤去され、台座だけになってしまった。

昭和55年、羽生市内の中学校の編成替えに伴い、閉校になった手子林中学校にあった金次郎像も手子林小学校に移設されることとなった。

翌昭和56年、須影小学校の越沼敏雄校長がくしくも手子林小学校に異動となった。越沼校長は、手子林小学校に旧手子林中学校からの分と合わせ2体の金次郎像があることを知り、須影小学校が台座のみとなっていることを思い出し、早速、後任の江原繁夫校長に相談、その1体が須影小学校に贈与され、旧台座に据え付けられた。昭和57年4月のことであった。

昭和59年に小学校の鉄筋校舎への改築に伴い現在地に移設された。

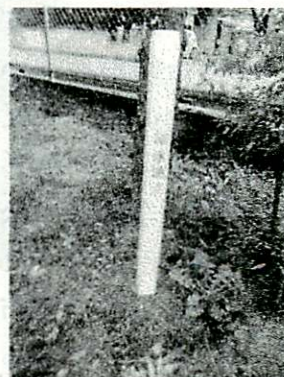
ちなみに、須影小学校の金次郎像は下手子林の小暮政市氏が寄贈したものだそうだ。いわゆる、現在、須影小学校の校門脇に建つ二宮金次郎像は、台座が酒井氏、像が小暮氏の寄贈により設立されたものである。

## (3) 須影小学校内水準点

須影小学校の境内に、高さの基準となる水準点がある。昭和50年に県によって設置されたもので、各種測量や地図作成の基準となるばかりでなく、地盤沈下調査の基準点として使用されているものである。

この水準点の高さは平成22年時点で15.56mとなっている。この高さは設置時の昭和50年より16cm沈下していた。

下羽生の眞光寺境内に設置されている水準点と比べると、小学校の方が1.5m高い数値を示している。



須影水準点

## 2 旧蓮華寺墓地

### (1) 蓮華寺

小磯家文書にこう記されている。

「当領須影村菩提寺之義ハ足利天下之頃ハ上藤井村源長寺旦那与申伝ヘアリ、又当村ニ而、多門寺与申寺有之正能村竜花院末寺与伝ヘアリ、其後于寛永ニ至リ蓮花寺ヲ建立、本山ハ高野山竜光院ト申伝フ、後チ



旧蓮華寺住職墓碑

五世了恵法印之代、京都智積院末寺ト成ル由、月光山清浄院蓮花寺ハ徳川三代之將軍家光公ヨリ御朱印地拾九石五斗余被下置候、明治三庚午且中願ニヨリ廢寺被付候、寛政年間より明治三十年迄陸奥国泉之城主御高式万石本多越中守御領分ニ有之候、能登守次兵庫之助ニ而泉県知事と成ル、夫与引渡ス、明治三午年より当埼玉県令始而野村盛秀殿管轄ニ相成ル、当家ハ往古ヨリ数代相伝ハリ居リ候処、寛永年間ニ至リ渡リ川小磯梶之助ト分地之由也、後チ徳川ヨリ御繩請承応三午年四拾九軒之内、繩請小磯権左衛門也（以下略）」

小磯家は、文書によると、「往古から続く家で、寛永年間(1624-45)に渡り川の地に小磯梶之助家を分家に出すとともに、承応3年(1654)には御繩請（おなわうけ）となった」とある。

御繩請とは、地域の開発者として領主から検地を受けた家柄のことで、一般的には検地帳を持っている家のことである。

この文書を記した小磯権左衛門は、繩請であるとともに、明治初期には須影村の村方三役（名主・組頭・百姓代）のうちの名主の補佐役である組頭に就任している。

小磯家文書によると、須影村には、当初、正能村竜花院の末寺である多門寺があり、その後、寛永年間(1624—44)になり高野山竜光院を本山とする蓮華寺が建立されたとあり、『新編武蔵風土記稿』に、開山の長義和尚が寛永7年(1630)9月21日に没したとある。

それらから、蓮華寺は、寛永元年(1624)から寛永7年(1630)の間に建立されたこととなる。それも、同誌に「別当寺蓮華寺」と記載されていることから、須影八幡宮の別当寺として、古寺である多門寺を母体に、建立されたものと思える。



第20世潮元墓碑

## (2) 江戸力士・武蔵川大治郎の墓碑

須影の旧蓮華寺墓地（須影共同墓地）に、江戸時代末期、幕内力士として活躍、その後、七代目年寄武蔵川として相撲会所の組頭（現在の相撲協会理事）等を勤めた須影出身の関取・武蔵川大治郎の墓碑がある。

正面に「嘉永元年六月二十二日狼屋院力蔵晴雲信士霊位」と大治郎の没日と戒名が、そして右側面に「武弼埼玉郡須影村産ニテ荒潮大治郎名乗ル文政十丁亥歳武蔵川大治郎改幕乃内ニ上ル年寄組頭役勤ム嘉永元年六月二十二日死ス 江戸下谷柳之稻荷大乘寺有之 行年五十五歳 俗名武蔵川大治郎」と、略歴が記されている。

武蔵川大治郎とは、須影八幡社勧進相撲で大関を張っていたが、文化年間に上京、父（荒潮大治郎として幕下で活躍）が所属していた桑川部屋に入門、文化10年(1813)に、荒汐虎之介として初土俵を踏み、翌11年、三段目に昇進したのを機会に、父の四股名である荒潮大治郎に改めている。文政9年(1826)、先代の武蔵川が鑿山の名跡を継いだことに伴い、現役のまま年寄武蔵川を襲名した。

翌10年に入幕し、天保9年(1833)二月場所を最後に引退している。幕内在位21場所(当時は年二場所)、最高位は前頭三枚目であった。引退後は年寄組頭を勤めていたが、嘉永元年(1848)6月22日に死去、浅草の大乘院とともに生家の蓮華寺に葬られた。行年55歳であった。

七代目武蔵川大治郎は、姫路藩侯のお抱え力士になるとともに、江戸時代の浮世絵師歌川豊国により力士画として肖像が描かれるほどの人気力士であった。



武蔵川大治郎墓碑

## (3) 須影蓮華寺境内富士塚

須影のラウンドアバウトの近くの旧蓮華寺境内に須影富士塚がある。

角行が創設した富士講の普及は、江戸ばかりではなく、武蔵・安房・上総・下総の各国でも組織化され、羽生領においても例外ではなかった。

江戸時代末期、羽生領加羽ヶ崎村の諸井勇吉元成により組織化された「丸加講」である。富士講を組織化した食行身禄の孫弟子の吉田仙行伸月は、富士信教の中の講として、「丸正講」を創設した。

諸井勇吉元房は、その吉田仙行の教団・富士信教丸正講社に入門し、角行及び食行の直系流派のみに許される「行」名を受け、「勇行」となった。

勇吉は、羽生地域での富士講普及のため、蓮華寺境内に富士塚を築造し、仙元大菩薩を勧請した。その山頂には「仙元大菩薩」が祀られ、建立者の筆頭に「諸井勇吉」の名が記されている。創設は享和・文化の時代か。

### 3 須影運動公園

#### (1) 大型板碑

須影運動公園内に2メートルを超える大きな板碑(いたび)がある。

板碑とは、鎌倉時代中頃から室町時代にかけての戦乱の続く時代に、武士の間で盛んに造立された石の塔婆で、その多くは板状に加工した石材の中心に梵字(ぼんじ)の種子(しゅじ)、いわゆる主尊を刻み、その脇に被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだものである。

なかには、梵字種子の代りに「南無妙法蓮華経」と刻んだ板碑もある。日蓮宗独特のもので、一般的に題目板碑と称されている。現在の卒塔婆の原形である。

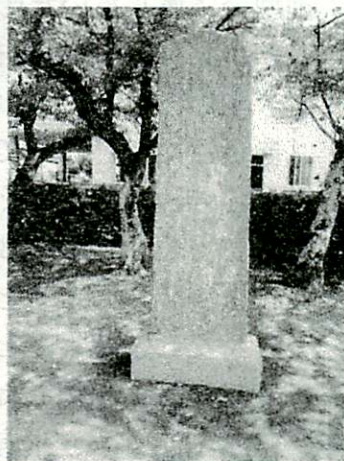
板碑は、日本全国で見ることができ、関東地方に集中しており、特に埼玉県には多く、約27,000基が確認されている。武蔵国の板碑は秩父特産の緑泥片岩で作られているところから青石塔婆ともいわれている。

戦国期頃になると急激に減り、江戸時代には、既存の板碑も本来の用途から離れ、用水路の蓋等、別用途に使われるようになっていった。

この須影運動公園内の板碑も、かつて秀安の東武鉄道踏切付近で発見されたものであるが、しばらくの間、秀安下郷地藏尊近くの堀に架かる橋として使われていたのを、郷土研究者により須影中学校の敷地内に移設されたものである。

種子(主尊)として大日如来が刻されているのはわかるが表面が摩耗してしまい、建立年代を図り知ることは困難な状況となっている。

鎌倉時代中期の永仁6年(1298)の青石塔婆が、秀安鷲宮神社脇の水路内から発見されていることから、それと同じ頃のものと思われる。



大型板碑

板碑を造立できるのは、ごく一部の限られた人達で、庶民は石製の板碑を建てることができなかったことから、鎌倉時代には、この秀安にも、このような巨大な板碑を造立できるほどの武蔵武士がいたと考えられる。

戦乱に終始していた時代においては、古文書等がほとんど焼失するなか、戦火の中を生き抜いた板碑は、中世の歴史を知る上での貴重な資料である。

旧須影中学校に所蔵されていた、前出の永仁6年(1298)のほか、正中3年(1326)、貞和3年(1347)、文和3年(1354)、貞治6年(1367)の青石塔婆は、昭和55年、須影中学校の廃校に伴い、しばらくの間、須影公民館で保管されていたが、平成28年に羽生市立郷土資料館に保管転換され、永久保存されることとなった。

## (2) 旧須影中学校立志の像

須影運動公園に「立志の像」がある。

旧須影中学校の体育館前に建立されていた像で、「夢があり希望があり無限の可能性を秘めている生徒諸君に、指標は何かと問いただしている」姿を表しているという。

当時校長であった折原浩一氏は、『須影中学校記念誌』に、立志の像の建立は、須影中学校に学ぶ生徒諸君に、夢と希望とハリのある学校生活を送らせようと思い、生徒のシンボルとして、建立を思い立ったと記している。

校長は、早速、学校関係者に相談、経費は、昭和48年度及び49年度の卒業記念品としてご協力をいただくこととなり、早速、実行に移った。

彫像製作は、当時、埼玉県彫塑界の若手のホープとして嘱望されていた塩原康正氏に依頼した。塩原氏は、三田ヶ谷村で生まれ、埼玉大学卒業後、創型会に属していた彫塑家で、当時は羽生第一高校で教鞭をとっていた。

その上、塩原氏は、折原校長の教え子でもあったことからか、一口返事で引き受けてくれたばかりでなく、当初はブロック積の予定であった台座も、「像が泣く」といって、茨城県岩瀬町（現桜川市）付近から産出する花崗岩をわざわざ運んでくれたほどであった。

そして昭和50年3月、念願の像が完成となった。

『広辞苑』によると、「立志」とは、「志を立てること。目的を定めて、これをなすとげようと志すこと。」とある。

孔子の教えを記した書に『論語』に、次のような有名な言葉がある。

「子曰く、吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従いて矩を踰えず。」

この論語の語から、15歳を「志学（しがく）」、30歳を「而立（じりつ）」、40歳を「不惑（ふわく）」、50歳を「知命（ちめい）」、60歳を「耳順（じじゅん）」、70歳を「従心（じゅうしん）」と呼び、それぞれ人生の節目の年としてお祝いをしてきた。

昔の武家社会においても、15歳に達した時に元服のお祝いをしていた。

15歳となる志学の歳は、人生最初の節目の歳であり、志を立てる歳でもある。

志学の歳は、高校進学や将来就きたい職業への目標などを立てる時期、いわゆる立志の誓いを立てるにはよい年齢である。



立志の像

#### 4 勝利の神として愛された須影愛宕神社

##### (1) 会下山 (えげやま)

かつて、このあたりは旧利根川が流れていたことがあり、その名残としての砂丘が砂山の地から南羽生駅あたりにかけてつながっていた。この愛宕神社の丘もその一部であった。

須影小磯家文書に、「当領須影村菩提寺之義ハ足利天下之頃ハ上藤井村源長寺旦那与申伝へあり」とあり、また、慶長6年(1601)に羽生藩から出された文書「桑原・佐伯・天野連署状」にも、「須影郷会下山の内に古来源長寺の末寺である浄慶寺と号す寺があるが近年中絶状態である」とある。

古老によると、この愛宕神社のあたりが会下山と言われていたという。

この会下山には、かつては藤井の源長寺の末寺であった浄慶寺があったが、中絶状態となり、やがて廃寺となった。そして江戸時代中期となり、その跡地に愛宕神社が建立されたと思える。

##### (2) 愛宕神社

須影公民館の西側に小高い丘がある。その頂きに「愛宕山大権現」の石宮を祀る祠があり、石宮には宝暦5年(1755)に建立されたと刻まれている。

この神社は、旧須影中学校に隣接しているところから、中学生、特に運動部員から愛された神社であった。

愛宕神社が「火伏せの神」であるとともに、神仏集合時代には勝軍地藏を本地仏として祀っていたことから、「武神」いわゆる「勝利の神」としても崇拝されていた。

運動部の中でも野球部においては、試合の前には、必ず、ここに祈願をして試合に臨んだという。

旧須影中学校の跡地も、現在は須影運動公園となり、須影地区の体育祭が開催されるとともに、少年野球、グランドゴルフ等の大会等に広く使われている。旧須影中学校運動部のように、愛宕神に祈願し、大会に臨んではいかがでしょうか。

また、この愛宕神社に隣接した地に、須影競馬場があった。神社の南側、須影保育園の西側の地で、松林の中や麦畑の中を走る小規模なもので、地域住民が楽しむ草競馬であった。開催日には、露店が立ち並び、戦後のすさんだ世の中に活気を与えるなど、村人にとっては楽しいひと時であった。

人々は、愛宕神社の勝利の神に祈願し、幸運を託して馬券を買ったのかもしれない。昭和23年、廃止となった。懐かしい思い出の施設であった。



愛宕神社